

現代 の 小説

1974年度
前期代表作

日本文芸家協会編

編纂委員

・

青山光二
菊村 到

伊藤桂一
駒田信二

巖谷大四
小松伸六

尾崎秀樹

1974年度
前期代表作

現代 の 小説

日本文芸家協会編
三一書房

1974年度前期代表作現代の小説

1974年 9月30日第1版第1刷発行

編 者 © 日本文芸家協会
1974年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 株式会社 三 陽 社

製 本 所 山 本 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3131~5 番

振 替 東 京 84160 番

郵便番号101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0093-742038-2726

まえがき

菊村 到

ほんとうに小説の好きな人や小説のわかる人は、むしろ長編よりも短編小説のほうを愛読するのではないかと思う。

小説の魅力は、短編のほうにより純粹に、より圧縮されたかたちで生かされている、と私は考える。ところが、残念なことに一般にどうも長編に比べて短編は軽く見られている傾向がある。単行本にしても、短編集は余り売れない。もつと短編集が売れるようになってほしいものだ、と思うが、これはやむを得ないことなのかもしれない。

映画の場合、プログラム・ピクチャとかB級映画と称されるものがある。いわゆるトリと称される呼びものの映画と一しよに上映される添えものの映画のことである。

ほんとうの映画好きの人は、超大作や話題作よりも、むしろ目立たないB級作品のほうを愛するようである。最近、映画ファンのあいだには、古い日本のB級映画を再評価しようという動き

が出てきているらしい。

アメリカ映画に例をとると、ドン・シーゲル、サム・ペキンパー、あるいはバート・ケネディといったようなB級のアクションものや西部劇を作っていた監督たちがAクラスにのしあがってきている。これはB級映画のおもしろさが、再認識されたことの一つの現われと言えるだろう。

短編小説の存在は、B級映画、プログラム・ピクチュアの立場とちよつと似ている。小説雑誌は、最近では長編の連載小説が減って、殆ど読切り短編によって占められている。連載でも、毎号、物語が完結するいわゆる読切りの連作スタイルのものが多くなっている。

そして百枚前後のいわゆる柱と称される作品を中心に、あとは数十枚のものが、脇を固めるかたちになる。

同じ読切り短編にも柱と、突っかい棒とがあるわけで、この突っかい棒の役目をしているのが映画ならプログラム・ピクチュアに当る。役者で言えば主人公の二枚目スターと脇役との関係に似ている。

私は、ほんとうにおもしろい作品は、枚数が多くて新聞広告や電車の中吊りなどに、でかでかと書き立てられる柱の作品よりも目立たない脇役の短編のほうにあることをしばしば発見する。そういうふだん、余り目につかない脇役の短編の魅力について私たちは、もう一度、考えてみる必要があるのではないか。

そのためにも、この「現代の小説」の存在や、その役割はたいへん貴重なわけである。このアンソロジーには、ページ割りの関係で枚数の多い、いわゆる柱の作品よりも五、六十枚か、それ

以下の脇役的短編のほうが主として選ばれているからである。

B級映画のおもしろさは、徹底した娯楽性にある。どう転んでも、いわゆるベスト・テンの圈内には入りっこないし、批評家からも完全に黙殺される運命にある。そのB級映画に要求されるのは、娯楽性だけ、と言ってもいいだろう。徹底した娯楽性の枠の中でB級専門の映画監督だけは独自の映像感覚をみがきあげるわけで、そこにこそB級映画の魅力がにじみ出てくることになる。

私は、B級映画のように娯楽性に徹した短編小説の出現を望みたいのである。この「現代の小説」の収録作品を選ぶ場合、どうしても文学的な密度の高い作品に票が集中してしまう。

このアンソロジーはその期に書かれた代表的な秀作を集めるのが建前だから、それは当然なのだが、私自身の好みからすれば、お行儀のよい優等生的な作品よりも、ずっとけた落第坊主や不良少年みtainな作品のほうに捨て難いものをおぼえたりする。

もっとも問題は娯楽性とは何か、ということにあり、それは当然、美意識の問題にもつながってくるだろう。娯楽性に徹するためには、それを支えて崩れないだけの強靱な文体が必要である。娯楽小説における文体の探求——これは私自身にとって切実なテーマであり、これに応えるには作品を書くことによって具体的にさぐりあてていく以外に方法はないだろう。

一九七四年度前期代表作

現代の小説

目次

樂園追放……………石坂洋次郎……………11

夫婦ソーカン……………泉 大八……………25

合牢者……………井上ひさし……………41

ある鎮魂歌……………円地 文子……………69

悲願……………加堂 秀三……………83

花の土曜日……………川上 宗薫……………105

春の煖炉……………佐藤 愛子……………127

蟹……………島 一春……………151

樹海はるかに……………城山 三郎……………175

純情二重奏……………田中小実昌……………201

ねじり飴……………田辺 聖子……………225

佇むひと……………筒井 康隆……………241

失われた季節―昭和娼婦伝……………中山あい子……………253

老いの鷺……………丹羽 文雄……………275

瘦梅記……………平岩 弓枝……………289

娑婆……………藤原 審爾……………305

タロベエの紹介……………星 新一……………315

惜春記……………三浦 哲郎……………329

まえがき 菊村 到……………1

あとがき 巖谷大四……………348

一九七四年度前期代表作

現代の小説

樂園追放

石坂洋次郎

作者のことは 石坂洋次郎

もしもこの世が樂園だったら、人々はぼんやりして氣力を失ってしまふだろう。いや、樂園など出来っこない。宗教・哲学・思想・科学・芸術、戦争など、私共はそれぞれの自己宣伝はたっぷりやっているが、どれもがこの世を樂園にする力をもたなかったことは、人類の長い歴史がはっきりこれを証明している。だが、樂園に夢をかけてあれこれと努力する。そこに人間の生甲斐があるのだと思う。もっと若かったころ、私は、人生とは天国、煉獄、地獄の中の煉獄だと考えたこともあるが、老人になったいまは、人生は地獄だと考えなくなっている。地獄。――決して恐ろしいだけの言葉ではないと思う。

明治三十三年一月二十五日、青森県生れ

第十四回菊池寛賞受賞

主な作品――「若い人」「石中先生行状記」

私は一九〇〇年（明治三十三年）、青森県弘前市に生れ、大学に入るまでその城下町でずうと育った。町は城跡の公園を中心に上町と下町から成っており、物は豊かでないが、のんびりした気分の町だった。殊に私の子供のころの家は、上町の西の端れにあり、途中で迂回している急勾配の新町坂の向うには、下町の人家、津軽平野、それから形のいい岩木山の展望がいつも開けていた。夏は緑で、冬は雪化粧をする岩木山は、子供達の身内のような存在だったのである。

遊び場が山ほどあって恵まれていた。新町坂の中途のさいかちの巨木の根もとから急な崖道を下りていくと、新町川が流れており、両側には田圃が開けていて、泳いだり魚をすくったりするには事を欠かなかった。さいかちのあたりから右側の崖を駆け登っていくと、広い招魂堂の境内の裏側に出了たものだ。招魂堂はいま公園の中に移ってしまい、昔の敷地は実業家の私有地になっているようだが、正面から入っていくと一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居、それから拜殿・神殿という設計で出来ており、西側を絶壁が支えているこの広い境内は、川とは

対照的な絶好の遊び場であった。

あのころの子供等は何をして遊んだか。男の子も女の子も質素な和服一点ばりで、洋服など市内のどここの金持の子供も着ていなかったし、服装の上では、男女ともパンツ・パンティーなど、窮屈な下穿きは着用してなかった。冬の遊びは、雪国であるにも関わらず、スキーはまだ出来てなかったし、皮靴に迂り金をつけた現在のスケートも考案されておらず、代りに三角形の下駄の底のトンがった所に迂り金をうちつけた「ベンザ」が、子供達に愛用されていた。スイスイと弾みをつけてはスーと迂っていく。急勾配で途中にカーブのある新町坂を下まで迂り通せる子は、町内でも二、三人しかいなかった。弱虫で無器用な私など、曲り角にいくと、傍の厚い積雪の上につんのめって一旦とまり、橋の上は底が浅く凍り方がちがうので、ここで調子が狂い、それをわたったところで、仰向けに引っくり返ったりする。また起き直り、雪まぶれになって、下町の通りに迂りこみ、腰を屈めたり立てたりして、距離を引きのばすように努める。

しかし、長居はしないで坂の上に引返す。というのは、弘前は城下町のせいで派閥根性が強く、下町組と上町組は、子供同士、大人同士、よく集団で喧嘩をしたもので、無事に迂り下りたはいいが、うっかりしていると、折から不機嫌な下町組の子供等に雪玉を投げつけられた

りすることがよくあるからだ。そして、ベンザで坂を這るのは上町の子供達の権利であり、下町組が這ろうとする時は、万一の時は喧嘩が出来るよう七、八人の仲間を集めてやって来たり、三、四人だと喧嘩の強い青年が一人、二人付き添って、坂の上に登って来たものだった。

その代り市外を流れている岩木川に水泳や魚捕りに行く時、私達は下町を通らず、新町川をさかのぼって、広い水田の畦道を遠まわりして行ったものだった。そして、子供時代に培われたそういう頑な狭い派閥根性は、大人になってからも私の人柄を形成する上で強く影響していたようである。

さて、鏡のように月が照っている真冬の一夜だった。

私達はベンザを穿いて、坂の上の四つ角のあたりで遊んでいた。七、八人のうち女の子も三、四人混じっていた。男女の差別がきびしい時代だったが、子供だけは大目に見られて、よく男女一緒に遊んでいたものだった。ただし、そのころ、女の子はベンザは穿けなかった。現在だって過激なスポーツは女性がやらないようなものだろう。女の子でベンザを這ったり、高い木に登ったりする者は、「ジャッパ」と呼ばれて馬鹿にされたものだ。ジャッパすなわち「お転婆」を意味する方言であるが、ジャッパな娘は嫁の口がかかりにくいとかで、子供までジャッパ

と呼ばれるのをいやがっていたものだ。

しかし、女の子が冬の雪道をまるで這らないというわけではない。下駄を穿いたままで這るのだ。空気に抵抗されないよう両腋に手をさしこんで、スイスイ、スーといった呼吸で、凍った雪道を這るのだが、男のベンザほど距離は出ないにしても、それなりにうまいものだった。その晩、男の子達がジャンプしたり、両足をひろげて円形に這ったりなど、ベンザのアクロバットの種もつきたところで、野口登美子という私より一つ年下（だから五年生）の女の子が、

「さあ、石坂のオンチャ（弟息子）、お月様見でるどごで、夫婦ごっこやるべし。つかまれせ」と、私の前に立って羽織の裾をつき出した。夫婦ごっこというのは、女の子が、ベンザを穿いた男の子を自分の羽織の裾につかまらせて、ゆっくり曳っぱって走ることを言うのである。その際、女の子は下駄が這っては困るので、下駄の歯の底に紐か縄きれを巻きつけたものだった。

私が両手で登美子の羽織をつかむと、胸の所で両手を握り合せた登美子は、トコトコとすぐ近くの公園の外濠に向って走り出した。登美子は将来芸者になるとかで、いまから週一ぺんお稽古ごとに通っていたが、身体つきもしまっていてよく、黒い目の光と白いきっちりした歯並びが魅力的だった。ふだんから彼女は、私が学校の優